
男装ガール～舞能事務所にあこがれたわたし～

空井美保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男装ガール〜舞能事務所にあこがれたわたし〜

【Nコード】

N9403Z

【作者名】

空井美保

【あらすじ】

Loveis4の湊美亜にあこがれている伊波若葉は自ら兄の名前を名乗り

男子校に転校してきた。そこは美亜たちが通っている学校の次にイケメンが多いといわれる赤町男子高等学校。

1年B組のクラスとなった若葉、席のとなりはバンド活動をしている日向くん。

コメディーや恋愛などいろんなジャンルを見たい人におすすめ！

舞能事務所―エンターテイメント―とコラボした作品です。

人物紹介&あらすじ（前書き）

あらすじでは公開していない細かいところなどを紹介しています。
小説は第2部からになります。

人物紹介&あらすじ

千葉 日向 ちば ひゅうが 16歳

少しミステリアスな雰囲気がある優しい草食系男子。

来琥（若葉）が転校してきてから席が隣で

分からないこともあると思い、いつも優しく学校生活のことなどなんでもおしえてくれる。

来琥が女だということには大地の次に気づく。

バンドだとボーカル担当

本田 新 16歳 ふんだ あらた

5人の中で一番お調子者キャラ。

なんでもズバズバいうところもあるが

天然な部分もある変わった男子。

来琥が女だということには知らない。

バンドだとドラム担当

若宮 聖夜 16歳 わかみや のえる

大人びた性格で兄貴的存在の彼は

いつも一歩離れたところから見守っている感じで何事にも冷静な彼。

来琥が女ということには気づいていない。

バンドだとキーボード担当だけど

来琥にキーボードを譲るため、ベース担当

比嘉 大地 16歳 ひが だいち

一番メンバーの中で明るい存在で子供っぽい
グループ一童顔で肌も白いので
中学校時代、文化祭で女装して踊ったらしい。
来琥が女だと一番初めに気づいているが
気づいていないふりをしている。
バンドだとギター担当

人物紹介&あらすじ(後書き)

大地のキャラは美男ですねの柊のようですよね・・・。
でも、柊とちがって明るいキャラなので
まねしているわけではございません。
ご承知ください。

あこがれてやってきた！男子校

わたしは湊 美亜ちゃんにあこがれている高校1年生になったばかりの女子。

名前は 伊波 若葉 いなみ わかば。

テレビで話してた、学生時代のこと・・・男装して入るなんてドラマみたいだと思った、そういうわけで

今日からわたしは女の子ではなく、男子。

東京にある 赤町男子高等学校に通うことになったわたし、なぜ、普通に合格したかということ

美亜ちゃんと同じく、お兄ちゃんがいるから、しかも、双子。

こんなに美亜ちゃんと条件がそろっているわたしはもしかしたら、元々こういう運命だったのかも。

現在2012年の5月2日

舞能事務所1の方の年齢+1になります。

美亜ちゃんは現在、23歳。

わたしも芸能界にあこがれています、そんなことを思いながら男子の制服を着てやっと高校に着いた。

美亜ちゃんと同じく転校してやってきたわたしは、ドキドキして深い深呼吸をついた。

美亜ちゃんやLoveis4の海くん、LovePopflowerの可愛くんが通っていた

節丘嬢学園は東京1、イケメンが多い学校で有名、赤町学園は2番目にイケメンが多い場所。

同じく、芸能活動をしている人もたくさん通っているといわれている。

その頃、新しくなった舞能事務所では

「今日から、Loveis4は格の違うグループになる目標でがんばるんですよ・・・」

とLoveis4の美亜が海と羽瑠と話していた。

「アジアでビューの夢をかなえるのがメイン目標だ、格をあげるのはその後だな。」

今年からアジアでビューに向けて、さらに実力をあげていくのが目標。

「まあ、婚約したとか言うやつには、厳しく行かないと駄目だな。」

「いいえ！婚約はまだ、してないんです！」

前回の1の方の小説をご覧になった皆さんは分かると思いますが実は美亜と羽瑠は婚約した会見を開いたのだ。

「はあ？どういうことだ。」

「これも、社長に言われたんだよ、ね、美亜。」

「ごめんなさい・・・今まで黙ってた」

その頃学校では・・・

「転校してきました、伊波 来琥です。よろしくおねがいます。」

伊波来琥 らいく とはお兄ちゃんの名前。

「今日から、1年A組の仲間になります、拍手。」

よくよく、一人一人の顔を見ると本当にイケメンだらけ。

わたしが座る席は・・・？

「若葉さんは、窓側の一番後ろの席に座ってください。」

一番、先生と離れた席だった。

何をしてもばれないような特等席のような場所。隣の人は千葉 日

向 ちば ひゅうが くん。

海くんとは逆で草食っぽい男子って感じ・・・。

「よろしくね、来琥。」

「ああ、よろしく願います!!!」
転校することに気合が入っていたわたしは、男子が使った言葉もばっちり!

自分のことは僕という。お兄ちゃんは今、日本にはいません。
パリでバンドをやっているからです、日本の友達3人とパリで活動しています。

「ただ、何もわたしに話してくれません。2年前からあっていないお兄ちゃんです。」

「どうして、瑠李くんのように妹を可愛がってくれないのでしょうか。」

・
そこところは美亜ちゃんとは違います・・・。

放課後

わたしの前に4人の男子が現れました。

一緒に帰ろうといわれたので、わたしははい!と答えました。

比嘉 大地 ひが だいち くん。

本田 新 ほんだ あらた くん。

若宮 聖夜 わかみや のえる くん。

そして席が隣の日向くん。

この4人がわたしのクラスの芸能人。

全員、舞能事務所には所属していないけど・・・。

「君、頭いいね」

と聖夜くんがわたしをほめてくれました。

聖夜くんは一番優秀成績な方でイケメンでパーフェクトな人。

「僕なんか、全然です!前の学校だと中の下だったし・・・」

わたしは頭が本当に悪い。

前通っていた共学高校は少し特別だった。

全員、ハイレベルな問題も

スラスラ解けるような人しかクラスにいないくて
性格もガリベンでめがねかけている人ばかりで
息苦しくて、本当にここが極楽。

「それにしても、肌白いね〜女の子みたいだ！」

「そっそうかな〜あははは・・・」

勘が鋭い雰囲気かしていた新くんだけど・・・
本当に鋭いかも・・・肌が白い〓女の子なのかな??

「僕たち、先に行くから」

と日向くんが言った。

「どうしてですか・・・?」

「僕らはバンドやつてるんだ。これからライブがあるんだけ・・・」
と日向くんが話し始めた瞬間、わたしは即効、

「ぼ・・・僕も!!!見に行きたいです!!!」

というわけで、バンドを見ることになった、わたし。

メンバーは日向くんと聖夜くんと大地くんと新くんの4人。

ヴォーカルが日向くんで

ギターが大地くん、ドラムが新くん。聖夜くんがピアノ。

「すごいですね・・・みんな楽器が弾けるなんて・・・」

思わず口から出てきたほめ言葉。

「そんなら、楽器弾いてみる??何やりたい?」

と大地くんが進めてきた。

さっきから大地くんはわたしに優しい。

女の子ってばれちゃったのかな・・・??

「それなら、俺ベースとかギター系やるから、ピアノやる?」

聖夜くんがベースに移ると話し出した。

そこに日向くんが・・・

日向「そうだね、手先が器用なら、僕らとバンドやってみない?？」
なんと、もしもわたしの手先が器用だったら

一緒にバンドをやらない?と言い出した・・・

これは夢でしょうか・・・?

「ああ・・・ありがとうございます!」

わたしは思わずお辞儀をして、大きい声でありがとつと叫んでしまった。

わたしは、メンバーに入ることが出来るのかな・・・?

違った魅力？4人のイケメン男子たち（前書き）

この小説は若葉の思っていることと解説のような文が2つつ分かれて
います。

そこに注目してこれから見てもらいたいと思います。

全員違った魅力のあるイケメン男子たち、若葉は誰と結ばれるのか？

違った魅力？4人のイケメン男子たち

そして、服に着替えた後

地図を見ながら歩いていると目的に着きました。

そこは小屋のような建物で、とてもライブなんか出来なさそうな建物でした。

わたしだけしかいないようなので外をぶらぶら歩いていると日向くんたちがこっちに向かって歩いてきました。

「ごめんごめん、待たせた？」

まるでデートをしているような感じで話しかけてくれた日向くん。

男装しているわたしはリアクションを取るのが難しくてどうしようもできませんでした。

「実はここは練習室みたいなものなんだ。本当はもっと離れた場所なんだけど」

と大地くんが言いました。

わたしはどういうことか分からず・・・

「え？ライブなんじゃないんですか？」

聖夜くんが指をさしながら

「まだ、5時じゃん、俺らのライブは6時からなんだ。」

「だから、僕らライブ前にはここに来て練習をしてからいくんだよ。」

「そうなんですか・・・勉強になります。」

そこで日向くんと聖夜くんと新くんがギターやピアノを拭く専用のウェットティッシュが売っている

お店がこの建物の近くにあるということまで3人が出かけてしまいました。

リーダーである日向くんから鍵を預かっていた大地くんが外が暗い

からと小屋の中に入れてくれました。

「うあ〜」

中に入ると、練習室はすぐあった。

「地下にいくと楽器がたくさんあるんだよ。」

「でも・・・芸能界に入ってるんじゃないんですか・・・？」

「所属したけど、オフアールないからね・・・」

「グループ名ってなんですか・・・？」

グループ名はというと

「エスポワールだよ。」

エスポワールとはフランス語で希望という意味。

希望や勇気の与えられる人になりたいというメンバーの願いからエスポワールという名前になったのだという。

「あ！帰ってきた」

「本当ですね・・・」

そのとき、大地はなぜか若葉に見とれてた。

「帰ってきますよ・・・？」

「・・・」

「大地さん・・・？」

「あっごめん、外でようか」

少し時間が掛かったなと思ったら

なぜか手にはギターを一本？

「あ、これは聖夜のなんだ。ついでに見てきたんだよね」

「日向がさ張り切っちゃって、グループのことになるといつつもなんだ。」

「そついう新だって張り切ってたじゃん」

日向さんの目がとても輝いていた。ギターの話をしているときはとっても笑顔で話して、そんな日向さんについてわたしは見とれていった。

「おーい、どこ見てるんだ??」

新の声でパシッと目が覚めた。

「あ、今、僕何を・・・??」

「ぼーっとしてたぞ?」

恥ずかしくて恥ずかしくて穴があつたら入りたいくらいでした。

どうしてこんなに向向さんが輝いて見えるんだろ?。

まだ、その理由は分かりません・・・。

でも魅力があるのは確かだとわたしは思いました。

「今日は、ライブ前の10分間ぐらいに音あわせするからまずは向
かおう」

バスで向かうことになったわたしたち

バスで6分ぐらいのところにライブハウスがあります。

そこで今日は20分間の見にライブをやるのが今のところの予定
です。

でも聖夜さんは言いました。

「アンコールがあれば続けるから、30分ぐらいと考えてたほうが
いいね」

現在わたしは一人暮らし。

門限などはありません、元々いい子にしていたほうだったので

お母さんも安心して、中学生のときも特に何も言われませんでした。

「そつえば、もう少ししたら赤町高校は寮生活になるらしいよ。」
と日向がバスの中で言いました。

わたしは女なのに寮生活だなんて

卒業まで一生男の格好をしないといけない・・・。

美亜ちゃんも寮生活をしているとき、こんな気持ちだったのかな？

「何人部屋ですか・・・？」

「今のところは1人部屋らしいけどね・・・ここ男子校だし少ない人数だからさ」

「この男子校の人数はわずか40人ほど。」

人数も少ないため廃校も考えられたくらいの学校だった。

学校の建物自体はとも新しいのにそんな学校の社長は予算が余っているということだ

出来るだけ、この学校の生徒たちには楽しい学生生活を送ってほしいということだ

寮部屋を作るということを実行した。

現在改築中で足場が組み立てられている状態。

「40人しかいないんですか・・・？」

「うん、ここはLoveis4の海くんたちの学園とは違って少ないんだよね・・・」

何気なく日向くんと話しているうちに

ライブハウスのある建物の前に着きました。

ライブハウスにお客さんがいっぱい入っているのが見えて

わたしはメンバーじゃないけど嬉しくなりました。

「わた・・・あ！」

「ん？わたし・・・？」

聖夜さんに話そうとしたとき

わたしと思わず言ってしまった・・・。

だけど聖夜さんは女の子だとは気づかずにスルーしました。

こんなことが何年も続くなんてと思うと

先に進むのがいやになってきます。

そしてやっぱりアンコールが出たので
30分どころか50分も掛かって、
帰る頃にはもう9時近くになってしまいました。
「これじゃあ、夜一人で帰るのは怖いな……」
「來琥……夜……一人で帰るの……怖いのか？」
少し馬鹿にしたような顔で話しかけてきた大地くん。
夜にもなると女子のようなことをいってしまうわたし……。
怖いけど、男装してれば襲われることはないと思じて
がんばって一人で帰ることになった。

次の日

朝早くに学校から電話が掛かってきました。
出てみると校長先生からだったのです。

「朝登校する前に、服や必要なものを持ってきてください。」
と校長が言いました。

女子の服しかない焦っているとき
インターホンがなった。

こんな朝早くから誰だろうと思っ
てみると大地さん。

いつ、住所を教えたのかも分からないけど一先ず、早着替えして
出てみました。

「大地さん……。どうして？」

ちよつと部屋見せてもらっていいといわれ
中に入ってきた大地さん。

当然女子の部屋、部屋は赤とピンクとオレンジでまとめていて
勘に鈍い人でもさすがに女子と丸分かりな部屋。

「あ、あの……大地さん……？」

「ここ、お姉ちゃんとかの部屋??」

「あ、あはい……。」

そのまま、家を出て行った大地さんだったけど

いったい何のためにわたしの家に来たのかはわからなかった。

大きな荷物を持って学校に行く

昨日のメンバー3人が日向の机の前で日向と一緒に何かを話していた。

「おはよう」

と声をかけるといつもどおり全員

「おはよう！」

机の中に教科書を入れている途中新くんが叫んでいた

「今日から寮生活か」

改装工事をやっていたのはわたしが転校して来る2ヶ月前からだった。

そして今日寮生活開始。

「大丈夫？お母さんとかに言っていないみたいだけど・・・」

いつもどおり優しく声をかけてきてくれた日向くん。

「お母さんも北海道に住んでるんで・・・」

わたしたちは全員北海道生まれ。

今はお兄ちゃんもわたしも子供だけは北海道を離れて生活中。

「部屋見に行きましょう！」

「おお」

5人と一緒に部屋を見に行く

もう、部屋には誰々との部屋かは決まっていた。

2人部屋で

大地くんと新くんの部屋、聖夜くんと陸也くん、日向くんとわたし？
本当に助かった、日向くんなら、何でも話せる・・・。

そして授業を終わらせ、夜になり・・・。

違った魅力？4人のイケメン男子たち（後書き）

前回の男装ガールと同様、寮生活をする設定にしました。
寮生活をするかどうか？3話をおたのしみへ。

寮生活開始！ハラハラドキドキの3年間、「よろしくおねがいます。」

新しい学校になった赤町男子高等学校。

庭も新しく出来て、学園のようになったけど、わたしにとっては最悪……。

本当に美亜ちゃんのようになってしまった……まだわたしが男のフリをして学校生活を送っているなんて誰も知らない。

男子40名＋女子1人の生活……これからどうなっていくの？

「ここが食堂ですか！新築の香りってやっぱりいいな」
そんな独り言を言っていると

日向くんたちが食堂にやってきた。

「今日から来琥と一緒に、悪いことおきなればいいけど。」
小さい声でぶつぶつ言っていた日向くん。

あれ？なんか昨日と性格が違う？そんな風に思ったら

聖夜さんと新しくにつれられて、人目がつかないようなところに……。

「日向はああ見えて、Sな性格だからな？優しいって思うのも2日ぐらいだけだ。」

「聖夜と俺もはじめて会ったときは優しいやつだなって思ったけど……」

「全然だった……。独り言がきついんだよね……」

見た目はとっても優しそうなのに……

色白だし、目は二重だし、身長も163センチで低いし……

昨日までの優しさはどこへ言っちゃったのでしょうか？

もう一度食堂へ行ってみると

テーブルに4人が座って食べていた。

あわててご飯を持って、そのテーブルに行くと日向くんが

「來琥ってさ、声高いよね」

「あ、うん．．でもさ、声が少し高い男子っているだろ？」

「たま〜にいるね、ヴォーカルやったほうがいいかもしれない．．

」

そうすると大地くんが

「そうだよ、日向は歌詞作るのうまいから、作曲とかしたら？來琥のために」

今日の朝のこと、本当に気になってしょうがない．．ばれちゃったのかな？

そんなことを考えていると、またしてもボーとしていた。

そしてご飯を食べ終わり

庭で空を眺めていると、新くんと聖夜くんがやってきた。

「取って置きの日向の秘密が聖夜もってるんだけど、知りたいか？」

「え？あ、あ、うん。」

取って置きの秘密ってなんだろう．．．？

「日向は今、お母さんもお父さんもいない。」

「どうして．．？」

「その理由は事故でなくなったんだよな？新。」

「おう、亡くなったのは日向が7歳のときだったっけ？」

これが日向さんの秘密．．？とっても小さい秘密のような．．ものすごく大きい秘密のような．．

わたしとはまったく違う人生を歩んでいた日向さん．．少しでも喜んでもらえることしたいと思った。

次の日の朝

今日は授業が休みのため、早く起きて、わたしが大好きなダンスを踊っていた。

これでも中学のときはダンス部に入っていたわたし。中学の全国大会で優勝したんです。

曲はもちろん Love is 4 の次に大好きな BERRY S。

ミライ レッツゴーはのりがよくて踊りやすいので大好き。

一生懸命踊っていると、教室に4人が入ってきた。

何をするのかな？と思いつつながら踊り続けていると聖夜くんがラジカセの音を止められた。

「どうして消すんですか？せつかくやってるのに」

「今日から5日間休みだ。その間にキーボードの基礎を教えるから来い。」

それだけを言って消えてった男子たち、追いかけてよとすると

大地くんが待っていた。

「大地さん……」

「音楽室、使っていないから、行くぞ！」

「はい！」

大地は実は来琥が女だということに気づいているのだ。

だけど、なぜか見守っている。

なんのためだろう。

「僕、1年生のときにピアノをやったので、楽譜とか使い方はバッチリです。」

「そうなんだ。でも、一応聖夜が教えてくれるから、基礎の上をね」と日向が言った。

「でも……僕、この後、出かけないといけない……」

日向「じゃあ、付いていくよ、僕も行きたいところあるしね」

そんなわけで、買い物タイムになり

日向さんと2人で買い物することになった。

元々、男子物の服を買うつもりだったし

出来たら日向くんにおすすめを教えてもらいたかったので

ちようどいい

「僕、この服屋でオーダーメイドでライブ衣装作ってもらってるんだ、Sっていう店。」

中に入ってみるとカラフルな服がいっぱい

女の子でも十分着れる服がたくさん

つつい女子のときの自分に戻ってしまいそう。

「あの服とこの服だけにします。まだ買いたいけど、学生だし。」

「じゃあ、帰ろう。」

その頃聖夜たちは音楽室の機械の掃除。

機械が壊れていると

レコーディングのときにノイズが出て

CDとして売り出せなくなるため

掃除は2日に1回は必ずやり、機械を操作するとき

点検をしてからやるのがきまり。

今日は日向がいないため、聖夜が掃除。

「あの2人なんか変だよな、いつつもくっ付いてばかりでさ」

と聖夜が口にする

「もしかしてだけどさ、女だったりして、あいつ、肌白いし声高いしな〜」

女だと知っている大地は

わざと話しに入り込み

「女だったらこんな学園に入らないでしょ〜」

とあくまで知らないふり。

買い物から帰る途中

日向が

「歌うときの声ってどれくらい出せる？オクターブとか・・・」

「えっと・・・3オクターブとか・・・？」

「そうなんだ、腹筋とか腕立て伏せとか一日何ぼ？」

「やってないです・・・」

そうするとずばり言った・・・

「やっぱり歌はだめだな」

それを言われた來琥は必死に言った

「どうしてですか！！僕、歌大好きです！」

驚くべきことが・・・

「だって、來琥は男じゃないもの。」

素敵な人と出会いました。

入ってきて3日で女子とばれてしまったわたし。

日向くんは優しそうだけどSな性格だと知り

少し不安があつたのに

どうして日向くんにはれちゃったんだろう・・・。

「このことは内緒にしてください。おねがいします!」

「何の目的があるの?」

「え・・・・・・・・・・・・・・・・」

わたしは何の目的もない。

ただただ、美亜ちゃんのおかげだけ

誰のためとか、何をしたいとか

自分でもよく分からない。

「目的もないのに、こんな学園にやってきたの?」

「え、その・・・」

「これはクラスに公表する。」

「駄目です!」

「じゃあ、目的を考えて?それまで言わないから。」

と行って走ってどこかへ言ってしまった。

わたしはそのまま学校に帰ると

聖夜くんや新くんが怒っていた

実は買い物に出かける時間は1時間のはずが

2時間も掛かってしまった。

「どこ言ってたんだよ、遅いじゃん」

というんなことを言われたけど

わたしはそれど頃ではない。
もっともっと大事なことがあったというのに

わたしは思わず部屋に閉じこもってしまった。
ベットに横なり

ふと、考え事をしてしていると

大地くんが部屋に入ってきた。

「何かいやな事あったの？いじめられたとか・・・」

「自分が馬鹿みたいだなと思いました。」

「え・・・？」

「あ、なんでもないです。」

もう女子ということは知っているが

決して打ち明けない大地は

遠まわしに女子に戻ってほしいと思い
こういった。

「久しぶりに家に帰ったら？授業5日間ないんだし。」

「大丈夫です！」

そのころ日向は川の前の草で出来た坂に横なつて
空を見ていた。

まだ、夜じゃないのに月が白く見えている。

日向はこう思った。

どうして月がここから見えるのだろう、何のために地球を見ている
のだろう。

理由はないけど、その理由を見つけたとき、この世界はどうなるの
だろうと・・・。

いつの間にか歌詞が出来上がっていることに気づいた日向は
あわてて学校に向かった。

帰ると聖夜と新が教室で曲の相談などをしていた。

「おいおい〜お前もどこ言ってたんだよ。」
と聖夜。

「リーダーと新人が時間守れなくてどうするんだよ。」
と新が言った。

2人が口を利くことはこの日はなかった。

次の日、日向に若葉が言った。

「わたしはこの学園に入ってから、素敵なお人と出会えました。それが理由です。」

「え？」

「その人がいるから、この学園にずっと居たい、そう思えます。」

わたしは昨日の夜に分かりました。

いつの間にか日向さんの笑顔や優しさが

わたしは好きになっていったことを。

だからわたしはずっと学園に居たいと思えた。

「だから・・・この学園に男装して入ってきたこと、言わないでください！」

「つまり、この学園に好きな人がいるということ？」

「・・・・・・はい・・・。」

正直に理由を話すと日向さんは分かってくれました。

そして、今まで通りに普通に優しくしてくれました。

そこに大地さんがやってきた、昨日のことも伝えなきゃと思い近づいてみると

「答え・・・出た？」

「・・・・ごめんなさい。わたしには好きな人がいます。」

「・・・・・・そうなんだ。」

少し落ち込みかけた大地さんだったけど

「これからは友達として何でも言えよ！気にすることないからさ。」

「あの・・・」

「その好きな人に好かれればいいな。じゃあな」

少し強くなりすぎている気がしたけど

気まずい関係にはならなかったので、本当によかった。

その後、図書室に行つて音楽についての本を3冊借りた。

よくよく見ると、ギターにも何種類も合つて

いろんな個性の色の楽器があることが分かった。

キーボードも色とかけれないのかな？

そう思っているときと新しくと聖夜くんがやってきた。

本を見て聖夜くんが言った。

「キーボードに色をつけることは可能だったさ」

さっき言つてたひとり言を

2人は聞いていたらしい。

「エスPOWERは希望だから、黄色のキーボードっていうのもよくないですか？」

「日向に相談すれば？」

と新しく言うつと

その本を持って教室へ走つていった。

次の日になり

音楽界に進むのは駄目だってさ・・・

聖夜の親が学校にやってきた。

「うちの子、寮生活の学園に通わせるなら、もっと頭のいい学校に行かせます。」

そういつて持ってきた退学届け。

先生はすぐに受け取りはしなかった。

「ですが、聖夜にも意思を聞かないと退学させることは無理ですから」

といわれると親も懲りずに

「親が言ってるんです。聖夜は頭がいいんです、1位を何回取っていることやら」

それを聞いていた聖夜自身もかつとなり職員室に入っていった。

「俺は音楽界に進みたい。高成績な学校より、仲間とここに残りた

い。」

だが、その理屈は親には通らなかった。

ある意味モンスターペアレント。

イライラしている聖夜がこういった。

「じゃあ、音楽界に進まないって言って、ここに残るのはいいの

よ。」

「じゃあそうしなさい。音楽の道に進むのは反対です。」

バンドをやるのを駄目といわれた聖夜は

この日から音楽室に来なくなってしまうた。

心配したメンバーたち・・・。

「これから4人バンドになるってことですか・・・？」

わたしは本当にどうしたらいいのでしょうか。

このまま、見とくだけでいいのでしょうか……。
わたしには何が出来るのかな。

そうすると日向さんは

「演技部の10人くらいが舞台を使って発表会をするらしんだ。
いきなり関係のない話を始めた日向さん。
大地さんがひらめいた。」

「そっか、聖夜も演技部のピンチヒッターか！」

そういうわけで東京赤町市民劇団に向かい
当日チケットを購入して

中に入ることが出来た。

学生手帳を見せたら、劇団裏に入ることが出来たので
入ってみると聖夜さんが王子様のような

かっこいい衣装に着替えて、台本を読んでいた。

「聖夜さん!!」

とわたしが呼んでみると

「なんでお前たちまで……?」

日向くんが事情を説明した。

「音楽界に行けないって聞いたからさ」

「今日は僕と日向と来琥しか来なかったけどね」

残念ながら新さんはこの日、学校でやることがあったらしいので
舞台を見に来ることは出来ませんでした。

「俺さ、王子の役なんだよね」

「どつという物語ですか?」

「眠れないリンリー!!!ってという題名で、リンリーっていう主人公
の物語」

「主演って凄いですね」

この舞台は演劇部の男子たちがやる物語で

リンリー役には隣の女子学園のNO.1に輝く美女が演じます。
芸能界を目指している劇団部の男子の1人が
風邪を引いて、声を出すことが出来ないくらいなのが痛いらしく
今回、ピンチヒッターとして出演になったら幸いです。

元々音楽部に入る前の聖夜は演劇部に入っていた

なのでその部の男子たちも聖夜が演技がうまいことを知っているみたいですよ。

日向くんが言いました。

「キスシーンってあるの？」

手を振りながら

「ないない！キスシーンなんてあるわけないでしょ」

そんなことを話しているうちに

舞台が始まる時間に………。

セリフ一部をご覧ください。

リンリーが汚いドレスで

外を歩いているとイケメンな若者と出会う。

「あなたは運命の人でございます。」

そんなことを言われ、少し照れた顔の若者は

「わたくしはメルシーという者です。」

話は一部進み、城に執事としてやって来るメルシー。

その城に住む皇女はなんとリンリーだった。

一緒に歌を歌ったり、買い物をしたりと幸せに暮らすリンリーに
毎回、付いてくことになるメルシーはリンリーが徐々に好きになっ
ていく。

「わたくしの運命の人もあなたかもしれません。」

こんな美女と美男の物語、時間は3時間、1時間半ぐらいに10分

の休憩あり。

これを見た後、お客さんを見渡してみたら
涙する人も多かったことに気づきました。

わたしも思わず、こんな恋が出来たらなと思いました。

バンドのメンバーに日向さんがいるだなんてと

思うと何をしていても笑顔になります。

そこで日向さんが小さい声でいいました。

「たとえ休みの日になっても、女子の格好はしないこと。」

「はい！」

聖夜さんが戻ってきたので

一緒に学校に帰る途中、聖夜さんがわたしに言いました。

「音楽部もやめて、勉強に集中しようかな」

「え？」

「俺、頭だけはばっちりだからさ」

「でも、自分のやりたいことが一番だと思います。」

「がんばれよ」

聖夜さんは正式に音楽部を退部することにして

帰宅部にして、勉強をすることに決めたようです。

わたしの願いは自分のやりたい道を進んでもらうこと。

日向さんと大地さんと3人で音楽室に向かう途中

日向さんが

「来琥はキーボードで僕がヴォーカル、大地がベース、新がドラム
で良くない？」

「僕はなんでもいいです！」

「じゃあこれで決まりでいいよね、新は聖夜がいないと何も出来な
いから」

ライバル出現？これが本当の恋……

「居ましたわ！」

学園に入ってきたのは隣の女子学園の生徒。

この子は確か、羅武^{ろぶ}ちゃん。

同じ高校1年生で、エスポワールの大ファン。

1番好きなのは、日向さんだったっけ？

学園に入ってきて早々、日向さんの前にやって来て、手を握った。

「わたくし、沢野丞羅武でございます。」

ぐいぐい来すぎな人って嫌だとか、この前言ってた日向さん。

「あ、ありがとう・・・ファンなんだよね・・・。」

苦笑いをしながら握手をした。

わたしがメンバーに入ったってことはまだ知らず

一緒に行動していると、わたしの隣に彼女がやってきた。

「あなたはメンバーなのかしら？」

「はい、僕は伊波来琥^{いぱ}でございます。」

「わたしは絶対に日向くんの心を奪うから。協力してね」

と生意気な口を利いた彼女。

わたしは何も居えず、そのまま、教室に入って行ってしまった。

なぜ彼女がやってきたのかというと

「わたしは今日から、音楽部のマネージャーをつとめます。」

なんと、マネージャーとして3年間、ここで過ごすなどといい始めた。

寮生活だというのに・・・男ばかりだというのに・・・

「わたくしは日向さまのお部屋に過ごさせていただきます。」

女とばれたら、隣の学園に知れ渡ってしまう・・・

そんな不安を抱えていると

「大丈夫、僕が守るから、何とかするから。」

日向さんはわたしを守ってくれればいいました。

とても嬉しくなって、ルンルンとしていると彼女が

「部屋つて2人部屋ですよね・・・？」

「そっそうですよ・・・？」

「日向さまと寝るのは恥ずかしいので、來琥さま、一緒に寝てくださいませんか・・・？」

「あ・・・はい・・・。」

なぜか女子2人で一緒に寝ることになってしまった。

現在夜の11時。

消灯の時間はもう過ぎているけれど

わたしは寝れなかった。

彼女、寝相がとっても悪い・・・

そんな様子を見ていた日向くんは

お姫様抱っこで日向くんのベットにわたしを降ろした。

「え・・・??？」

「寝れないんでしょ？」

その後の意識はなかったけれど

ぐっすり寝てしまったわたしは、朝になると

ベットの前には大地さんが・・・。

「あー！」

と思い、起き上がると

大地さんは何も見てなかったような顔で寮部屋を出て行った。

日向さんを見ると、まだ寝ていたので

そーっと朝食を食べるに

食堂へ向かった。

羅武さんもしかしたら・・・見ていたのかも・・・
食堂で一人で食事をしている羅武さんと
目が合うと、にらまれてしまった。

「あなた、わたしを誰だと思ってるのかしら」

「お、お嬢様です・・・」

「だったら、一人で寝させるなんてどういこと？」
そうすると大地さんがやってきて
こう言った。

「この学園に入ってくるなら、それくらい我慢しないとイケない
じゃない？」

「え？」

「そんなにいい男子そろってないし、僕たちはお前の執事でもない
からね」
そういうとやられた・・・という顔で
食堂を出て行った。

「助かりました」

「まあ、本当に僕たち執事じゃないからね」
大地さんまでどこかに行ってしまった。

10分ぐらいでご飯を済ませて
ろうかを歩いていると

新しくとすれ違ったので声をかけると

「俺、5日間だけ、バンドやらないから
といて

外に出かけてしまった。

この学園って勉強ないの？って思ってる方もいらっしやいます
が学園では15日まで休みである。

ミニ春休みみたいなものでしょうか・・・？

それぞれ、休みになると
部活動をやったり、勉強したり、買い物したりと
いろんな自由なことが出来る。

「大地さんと日向さんとわたしだけでバンド練習出来ないしな」
2人ともわたしの事情も知っているし、安心だから
この際に学校に居たら出来なくなることをやっちゃおう！
そう思い、日向さんと大地さんと呼んで、やりたいことをすべて言
った。」

男子の服を買う、映画を見てデート気分を味わう、恋愛したい！
この3つがかなえば、言うことがないと。

だけど恋愛は本当に好きな人でないと、恋愛とは言わない。
でも・・・わたしは日向くんが日がたつに連れて
引き寄せられているというか・・・好きになってるというか・・・
16年間恋というものを知らないわたしは
恋愛というものはどういいうことなのかも知らない。

普通に話せて、一緒に居るのも平気なのはただの友達？

「わたし・・・恋をしたいです。」
そういうと、2人はびっくりしたような顔をした。

なんでそんな顔をするのかな？と思っただわたしは本当の好きって何
かを聞いた。

一番最初に大地さんが
「ライバルとか、友達が、思っている人と話すと、胸が苦しくなる
こと？」

「僕が思うには、一緒に居て飽きない人じゃないの？」

「日向さんはわたしのこと、どう思っているのですか・・・？」

この時のわたしはなんてことを口にしたんだろうと思う。

「わたし・・・本当の恋がしたい。教えてください。おねがいします。」

「

これから、わたしの恋愛物語がスタートする。

すれ違いの恋

わたしは今、素敵な人と出会ってしまった。

彼は近くににいるのに、思いはとつても遠くて届かない。

羅武さんがこの学園に入ってきてから

わたしと日向さんの間が広がっている・・・。

羅武さんがいなければ・・・思いはきつと届くはずなのに。

あと5日間で休みが終わってしまう。

わたしは今まで、ずっと自分に甘かった。

だから、少しの傷も痛く感じるように

恋愛だつて、苦しみが強くなってしま・・・。

自分に強くなりたい・・・強くなりたい・・・

毎日そう強く心の中で願っている。

その頃日向さんと新さんは

「日向はさ、來琥のこと、どう思ってるんだ？」

「何で？」

「いや、來琥つて女みたいだからさ」

「來琥は正真正銘男だよ。」

わたしが女じゃないかということがB組ではうわさになっている。

現在、大地さんと日向さんはわたしのことを知っているけれど

そのほかは知らない。

日向さんも最初は抵抗があつたらしいけれど、今は影で見守ってくれている。

わたしは今、ピアノの練習をしています。

エスポワール、メジャーデビューをするために

毎日毎日、デビュー曲用のパートを
3時間練習しています。

音楽室に羅武さんが入ってきました。

「あなた・・・女でしょ。」

「え・・・?」

「体も女っぽいし、声も顔もすべて女子から見たらお見通しよ。」

「あの・・・」

「え?やっぱり本当なんだ〜罨に引つかかるなんて、ドジね」

まんまと言葉に引つかかってしまい、女と知られたわたし。

あんな性格の羅武さんだから・・・きつとばらされる。

「どうして女子がこんな格好してんのよ」

「このこと・・・秘密にしてください!」

「いいけど、条件があるわ、日向くとわたしをくっ付けて。」

「え・・・?」

まるでわたしが日向さんのことが好きなのをわかって言っている様に聞こえた。

でも・・・逆らったらわたしは学園に入れなくなってしまっ。

「・・・はい・・・。」

「あなたは精々大地くんとも結ばれることね、彼、優しいから。
じゃあ」

今日から日向さんと羅武さんをくっ付けないといけなくなってしまう
いました。

誰にも相談できない・・・。

大地さんのこと振っちゃったし・・・

新さんはわたしのこと男だと思っているし。

次の日

朝から羅武さんは日向さんにくっついてばかり。

「今日はライブですよね・・・!わたくしもついていきます。」

「あ、ありがとう・・・來琥？付いていくんじゃないかなかったっけ？」
「いいです・・・。お2人で行って来てください。」

実は昨日

羅武さんに言われた。

「あんたはグループにいたら駄目なのよ。」
メンバーでもない羅武さんに何が分かるの？って
言い返したかったけれど、ちょうど新さんが
音楽室に入ってきたため、何も言い返せなかった。

学生服に着替えて、B組の教室に入ると
大地さんと新さんがいた。

「羅武をこの学校から出してみない？」
と新さんが言った。

「來琥も嫌なことされたりしたんだろ？」
と大地さんが言った。

もしも、わたしたちが羅武さんを学園から追い出したら
わたしのこと、ばらされるかもしれない・・・
わたしは必死に追い出すのは駄目と言った。
優しい大地さんは

「まあ、そこまで來琥が嫌がるなら、そのままにして置く。」
そういわれて、ほっとした。

夕方日向さんと羅武さんが帰ってきた。
その頃わたしは部屋で勉強をしていたけれど
頭の中は日向さんでいっぱい。
わたしを守ってくれるって言ってくれたけれど
口だけで何も守ってくれない。

「でも・・・。」

日向さんが笑っていると何でも出来る気がしてくる。
この学園に来て、楽しいって思えたのは
日向さんのおかげ……。

2人が帰ってきて、わたしたちの部屋に2人がやって来ました。
そうすると羅武さんが

「あゝ楽しかったね！」

と大きな声で自慢してきました。

本当にこの空気……大嫌い……。

日向さんにちよつと来てと言われ

やってきたのは誰にも見つからない秘密の場所。

「あの……なんですか？」

「來琥はさ大地のことが好きなんですよ？」

「え？」

「僕は応援するから、ただそれだけ。」

違うとも言えないほどすぐにわたしの前からいなくなった日向くん。

このままだと想いが届かない……。

わたしは日向さんのことが好きなのに……

きつと羅武さんがうそのことを教えたに違いない。

わたしはそう思った。

あこがれのLoveis4とBERRY5がやって来た！ズバリ・・・？

次の日わたしの憧れである

Loveis4とBERRY5が特別に訪れることが決まり

テンションも何もかもが

おしゃれしたい気持ちも抑えて、11時を待つ。

「美亜ちゃんに会いたい・・・羽瑠ちゃんとラブラブなのかな？」

「侑大くん、本当に小さくて童顔なのかな？」

いろんなことをわたしは知りたい。

そのたびに独り言をぶつぶつと言っていたわたしを見て

新さんは

「おいオタク。少し静かにしろよ。」

「オタクなんかじゃないです！ただ、憧れなんです。」

わたしの憧れ・・・

「テレビで笑顔を届けられるような女優さんになりたいです。舞能事務所に所属して」

それを聞いた日向くんは

「いい夢じゃん。美亜って人に憧れてるなら、彼氏もつくらないとね」

「!?!」

まさか・・・わたしが好きな人にそんなことを言われるだなんてわたしはびっくりしました。

そしてついに・・・

学校にLoveiss4とBERRYSがやって来たのです。とても豪華な衣装でやってきた9人たち。

はじめましてのあいさつはなんと

わたしがこの学校にやって来たのもこの人のおかげでもある美亜ちゃん。

「皆さん、おはようございます。美亜です。今日の5時までよろしくお願いします。」

そして侑大くにマイクが渡り

「初めまして桜田侑大です。5時まで、笑顔を届けられたらと思います。お願いします。」

わたしの夢と同じことをいった侑大くん。

思った通り、背が小さくて、声も少し高く、童顔でアイドルその者でした。

11時半ごろ

わたしはピアノの練習をしていました。

芸能人が来たといっても、ここは学校です。

いつもどおり勉強や寮部屋の掃除など休みの間でも朝早くから勉強している時間のときは

せつせと動いています。

そこに美亜ちゃんと侑大くんが音楽室に来たのです。

そうすると美亜ちゃんがずばり言ったのです。

「來琥くんは女の子でしょ？」

と、しかも侑大くんがいると言うのに・・・

「あ・・・・・・・・」

でも侑大くんは決して驚かなかった。

「美亜見たいだね！來琥くんは絶対に有名人になれるよ」
侑大くんの年齢の差は5歳。

美亜ちゃんとは7歳差・・・さすがにわたしが20歳になる頃は結構お姉さんになっていているんだなと思いました。

「僕らの事務所2つあるんだ、女優&俳優と歌手グループに分かれてね」

「なので、日向くんとかとバンド組んで入ったら？」
と侑大くと美亜ちゃんに進められた。

全然、仕事とかのことを考えていなかったので、美亜ちゃんたちに進められたとおり

歌手になろうと決めたのです。

カラオケの点数はいつも80点以上だから、自身はあります。

「來琥くんがデビューする頃25歳以上かゝ僕たち。」

「わたしはもうアラサーって感じですね」

そして時間は高速に進み

あっという間に5時になった。

いろんな話が出来てよかったし、将来のことについてもアドバイスをもらって

いい時間を過ごせたなと思いました。

両部屋に戻り、勉強をしていると

日向さんが入ってきた。

「大地とはうまく言ってるの？」

手が止まったわたしはふとあの言葉を思い出した

(あなたが日向さんを取ったら、どうなるかわかってる?)

羅武さんが言った言葉。

「大地さんとはただの友達です。バンドの仲間というか・・・」

「僕のこと好きにならないの?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

シーンと部屋が静まる中

カチツカチツと進む時計の音が鳴り続けた。

あこがれのLoveis4とBERRYSがやって来た！ズバリ・・・？（後書き

次回のお話は1年後の7月ぐらいにタイムスリップしてきますので
皆さん、あれ？って思うかもしれませんが

ぜひぜひ見てくださいね！

短いお話でしたけれど、楽しんでもらえましたか？

次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9403z/>

男装ガール～舞能事務所にあこがれたわたし～

2012年1月6日15時46分発行